

自分の命を守り，他の人や地域と協力していく児童の育成

～各教科・領域と関連させた防災教育を通して～

仙台市立長町南小学校 全教職員

I 実践の趣旨

本校では，新たな学校防災教育モデル校3年目の指定を受け，学校教育目標の中でも，防災教育の充実，推進を図っている。

平成25年度仙台市生活・学習状況調査の「人が困っているときは，進んで助けている。」の質問では，「あてはまる」と回答した児童は市内平均より低い傾向があった。また，地域との関わり合いの質問でも，市内平均より低い傾向となっていた。防災教育の目標でもある「共助」の意識をさらに高め，非常時に進んで他の人や地域の力となれる児童を育てていきたい。

以上のことから，児童の発達段階に応じて，関連する教科・領域における直接的・間接的な指導を通して，児童の防災対応力を育み，災害時に的確に行動できる力を身に付けさせていきたいと考えた。

II 実践の概要

1 研究の目標

様々な教科・領域から，防災・災害の視点で発達段階に応じた授業を実践していくことにより，防災・災害に関する正しい知識や対応方法，態度を身に付け，自らの安全を確保できる児童，進んで人や地域の力となれる児童を育成する。

2 研究の方法

新防災教育副読本小学校1・2・3年版及び小学校4・5・6年版を活用した授業を中心に授業研究を行い，校内の年間指導計画を見直していく。

○防災教育として位置付けることができる教科や単元の洗い出し

○教科本来の指導に防災教育を重ねる工夫

○どの学年でどの時期に何を教えるかという系統性の吟味

3 研究の視点

<視点1> 指導過程の工夫

○各教科・領域の学習の中でどのように防災教育を入れたか

<視点2> 資料や教材の効果的な活用

○どのような効果的な資料や教材を活用したか

4 実践の実際

1 学年

○教科・領域 学級活動

○単元名・活動名

「避難の仕方を考えよう」（1時間）

（関連：新防災教育副読本第4章3）

「防災リュックを用意しよう」（1時間）

（関連：新防災教育副読本第4章6）

○活動（学習）の概要

いつ，どこで起きるか分からない災害に遭ったときに，自分で考えて行動ができる児童を育てたいと考えた。カードゲーム「ぼうさいダック」を使った活動と，もしもの場合に備えて，防災リュ



ックの中身について考える活動を行った。

「避難の仕方を考えよう」では、地震が起こった際に、身を守るための三つのポイントを確認した。その後、カードゲーム「ぼうさいダック」で、実際に身体を使って活動した。声を出して動作化することで、防災や日常の危険から身を守ることを学んだり、挨拶やマナーなどの日常の習慣について学んだりした。「ぼうさいダック」はたくさんの項目があるので、身に付けさせたいことを吟味した。繰り返しゲームを行うことで、児童も楽しんで取り組んでいた。



「防災リュックを用意しよう」では、リュックの役割を確認した。防災リュックに何を入れるか、自分なりに考え、カードに絵や言葉でかき、ワークシートに貼り付けた。児童の家庭の実態が様々なので、自分が必要だと思うものを考えながらカードに記入する様子が見られた。

○成果と課題

「ぼうさいダック」の活用で、自分の身を守ることに、楽しみながら学ぶことができた。写真資料やイラストの提示は、災害について経験の無い子供たちに、イメージさせるのに効果的であった。今後も、適切な資料の選択が重要であると感じた。

2 学年

○教科・領域 生活科

○単元名・活動名

「ふりかえろう まちのすてきなできごと」

(2時間)

(関連：新防災教育副読本第4章3)

○活動(学習)の概要

「地域のよさに気付き愛着を持つこと」をねらいとした町探検の単元に防災教育の視点や内容を加えて指導に当たった。児童が地域を知ろうとする思いや願いを実現していく活動の中で、自分たちの「安全」が守られていることに気付いたり、地域のよさを感じたりできるように指導過程を工夫して学習を進めた。



具体的な学習内容としては、町探検4回目のワークシートに地震を想定した項目を作成し、安全面への気付きを促した。児童は地域でも安全面への配慮をしていることに気付き、校外学習先で地震が発生したとしても地域の方々に助けてもらえるという安心感を持つことができた。



2時間目には、これまでのワークシートや地図、写真等を使って、地域全体から見守られていることをクラス全体で確認し、各グループでお店や施設のよさをまとめる活動へとつなげていった。お世話になった地域の方々への感謝の気持ちを伝える活動であることを意識し、地域へ発信するため

のポスター作りに取り組むことができた。地域のよさを再確認する学習を進めることができた。

今回の取組で、教科の中での防災教育の取り上げ方を例示することができた。生活科の指導要領改訂で「人との関わりや安全への配慮」が入ってきたこともあり、防災教育と関連させた学習を展開できた。

○成果と課題

1 単位時間全て使い、防災教育を全面に出して進めるのではなく、教科・単元のねらいから離れずに無理なく学習活動を進めていくことができた。副読本は、下学年の3年間で実施しない項目がないようにと求められているが、各教科とうまくリンクさせてカリキュラムに取り入れていくことが難しいと感じた。

3 学年

○教科・領域 総合的な学習の時間 学級活動

○単元名・活動名

「学校の備蓄倉庫を見よう」(1時間)

「生きるために必要なもの」(1時間)

(関連：新防災教育副読本第4章9)

(関連：新防災教育副読本第4章6)

○活動(学習)の概要

社会や総合的な学習の時間で学区探検をしたときに見つけた、学校や公園にあった備蓄倉庫に入っている物を知る活動を通して、備蓄倉庫には避難してきた人たちのためにいろいろな物が入っていることに気付かせた。その中で命を守るために



「水」「食べ物」「体温を保つ物」が最低限必要で

あることを学習し、それを基に以前に考えた自分の防災リュックの中身を見直させる活動を取り入れた。



実際に防災リュックにはどんな物を入れたらよいか考えさせるときに、児童がイメージしやすいように資料や実物を提示したり、体験的活動を取り入れたりした。

授業を通して、学校に命を守る物があること、食べ物を準備するときには、湯や水だけで単に食べられる物や日持ちのする物が必要なことに気が付いた。また、身近にある新聞紙、シート、カーテン、ビニールなどを使うと身体を保温できることが分かった。そして自分の防災リュックに入れる物を再考することができた。

○成果と課題

備蓄倉庫を実際に見ることは、児童にとって初めてなので、興味を持って取り組むことができた。また、資料や実物を提示したり、体験させたりしたことは、実際に災害が起こったときに役立つ活動になった。しかし、どの教科の扱いにするかという課題が残った。

4 学年

○教科・領域 学級活動

○単元名・活動名

「いろいろな自然災害」(1時間)

(関連：新防災教育副読本第3章③)

「災害が起きたら」(1時間)

(関連：新防災教育副読本第4章①)

○活動(学習)の概要

災害が起きた場合に、自分や身近な人たちの身を守るために主体的に行動したり、身近な人たちと協力して、災害に備えた行動を取ったりすることができるようにすることをねらいとした。



初めに、さまざまな自然災害があることを、今年実際に起きた災害と関連させて想起させた。

その上で身を守るための行動について考えさせた。まず、市の避難場所について知らせた。次にその場に応じた身の守り方を考えさせた。

その中でカードを使ったシミュレーションゲーム「こんなときあなたはどうする!？」を取り入れた。地震や大雨など、比較的よく起こる四つの災害と、家や公園など子供が普段行く(いる)四つの場所を描いたカードを用意し、それぞれ1枚ずつ引いて、そのときの状況を想起し、身の守り方を考えさせた。

児童はカードを使ったゲームに興味を持って取



り組んだ。またカードの絵や写真からそれぞれの場合の身の守り方について具体的に想起することで、自分なりの身の守り方についての考えを出し合い、活発に議論を行うことができた。

○成果と課題

カードを使ったシミュレーションゲームは、児童が意欲的に考えながら取り組むことができた。それぞれの考えを共有する時間を十分に確保できると良かった。災害が起きたときの時間帯やそのときしていた行動のカードも作成し、更に細かい状況設定でも考えさせたい。

5 学年

○教科・領域 総合的な学習の時間

○単元名・活動名

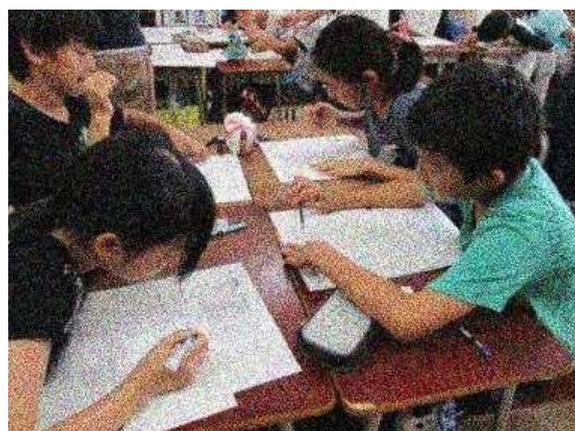
「未来をひらく南っ子調査隊」(2時間)

(関連:新防災教育副読本第2章3)

○活動(学習)の概要



「南っ子調査隊」では、自分たちが暮らす長町の昔の様子を調べ、今と比較して、より良い町にするために自分たちでできることを考えるという活動を進めていった。その導入として、新防災教育副読本の「未来へつなぐ」を活用した。まず、災害に強い町づくりを目指した神戸市が、どのように復興していったかを写真などで紹介した。ま



た、仙台市の震災復興計画やエコモデルタウンについて資料から読み取った。そして、災害に強い町づくりとはどんなものか自分なりのプランを考えた。ライフラインを整備すること、地域に顔見知りを作ることなど多くの考えが出され、それを発表して深め合うことができた。

次時では、自分たちが暮らす長町に目を向け、年表などから、町の様子の変化を知り、現在と昔の長町の「よさ」について考えさせた。年表には、災害に関する事柄（長町利府断層、慶長津波、宮城県沖地震、東日本大震災）を加えたので、児童が今後調べていくテーマの一つとして「減災への取組」を意識させようとしたが、児童にとってはやや難しかった。

○成果と課題

神戸の写真や蛸薬師を取り上げたのは良かった。資料の発掘、蓄積が今後も必要になってくる。地域を学ぶと愛着が持てるようになり、防災につながる。地域学習の大切さが改めて感じられた。

6 学年

○教科・領域 道徳 学級活動

○単元名・活動名

「わたしたちにできること」（2時間）

（関連：新防災教育副読本第4章3
第5章3）

○活動（学習）の概要

災害発生時の生活の不便さや困難さを考え、自分にできることを考えることをねらいとした。



第1時では、自分たちの生活に影響を及ぼす災害を挙げ、それらが引き起こす生活の不便さ、困難さについて話し合った。東日本大震災時に「どんな人が」「どんなことで」「どんな場所で」困っていたか、副読本や当時の学校の写真を参考にしながら考えた。当時2年生だったこともあり、詳しく覚えている児童は少ない。当時の写真を見ながら、「こんなに大変だったんだ。」「こんなことをしていたんだ。」とつぶやいていた。人々の生活の困難さや不便さを、付箋を使って画用紙に貼りながら整理し、様々な人々が様々な場面で困っていたことを改めて知ることができた。



第2時では、前時を受けて、「食事」「トイレ」「居住スペース」「その他」の四つの観点で、災害時に自分たちができることを考えた。「自分たちでできること」「大人と協力してできること」「できないこと」に分類して、グループで話し合わせた。ワークシートに自分の考えを書いてから話し合わせたので、活発な意見交換が行われた。実際には体験していないものの、児童なりに自分のできそうなことを考えることができた。児童の感想からは、「共助」の意識の高まりが感じられた。

○成果と課題

本校の当時の写真や副読本を有効に使うことで、児童の興味、関心を高めることができた。話し合ったことをグループごとに発表させたが、時間が掛かりすぎたので、効率の良い方法を考えなければならない。教科・領域を学級活動と道徳の扱いにしたが、学習内容から判断すると、吟味する必要がある。

ひまわり学級（知的，情緒，肢体不自由学級）

○教科・領域 生活単元学習

○単元名・活動名

「安全で楽しい生活をしよう」（1時間）

「そなえておこう」（1時間）

（関連：新防災教育副読本第4章6）



○活動（学習）の概要

防災の授業で大切なことは、「毎日の積み重ね」だと考えた。その上で、「もしものときにどうするか」ということを、具体例を挙げながら考えさせてきた。この単元では、非常持ち出し袋の中身を確認し、もしものときに自信を持って使えるように、実際に使ってみることにした。家庭科室でカップラーメンを作るという活動を行った。普段使っている教室以外の場所でも落ち着いて行動でき



るようになることをねらい、特別教室で活動を行った。手順等を分かりやすく伝えるために、黒板やパソコンで、言葉や写真を提示した。お湯の量や水の量を調整して、沸く時間をしっかり考えさせることができた。また、ガスの匂いを嗅がせる

ことで「この匂いが出ているときは危険だ。」という経験をさせた。さらに、震災等を想定し、割りばしや紙コップを使わせたが、上手に使うことができた。このように、不便さを知っていると、生きる力が身に付き、防災に生きてくると感じた。

○成果と課題

児童は楽しんで学習に臨むことができていた。懐中電灯の使い方や電池の学習を通して、積み重ねが大切だと感じた。また、時間が経つと、覚えている部分が少なくなってしまうので、今回は、継続して学習に取り組めるようにした。予想しなかった児童の動きや言葉が出てきたので、実態を十分に把握し、予想される行動を考えて授業に臨みたい。

Ⅲ まとめ

実践授業の他にも、各学年、年間を通して防災教育の授業を行ってきた。副読本は1・2・3年、4・5・6年に分かれているが、同じ単元・内容でも、発達段階に応じて学年相応に指導していくこともできる。

本校では、津波を体験した児童もいる。写真資料の活用する際には、これらの児童に配慮をしていかなければならない。津波体験者等は既に実体験済みなので、津波等の資料は必要がないと考える。その他の児童については、関心を高めるために活用していく。画像データは今後も収集、蓄積していきたい。

防災を意識したこれからの町づくりを考えた際に、児童から「顔見知りを多くする」という意見が出た。これも防災の大事な視点の一つである。児童が地域を好きになり愛着を持つことが、防災につながる。その意味でも、生活科や総合的な学習で地域を学ぶことがとても大切である。

震災当時、6年生は2年生、5年生は1年生であった。平成30年には震災を経験していない児童が入学する。震災の記憶を風化させないためにも、指導内容、資料を吟味していきたい。